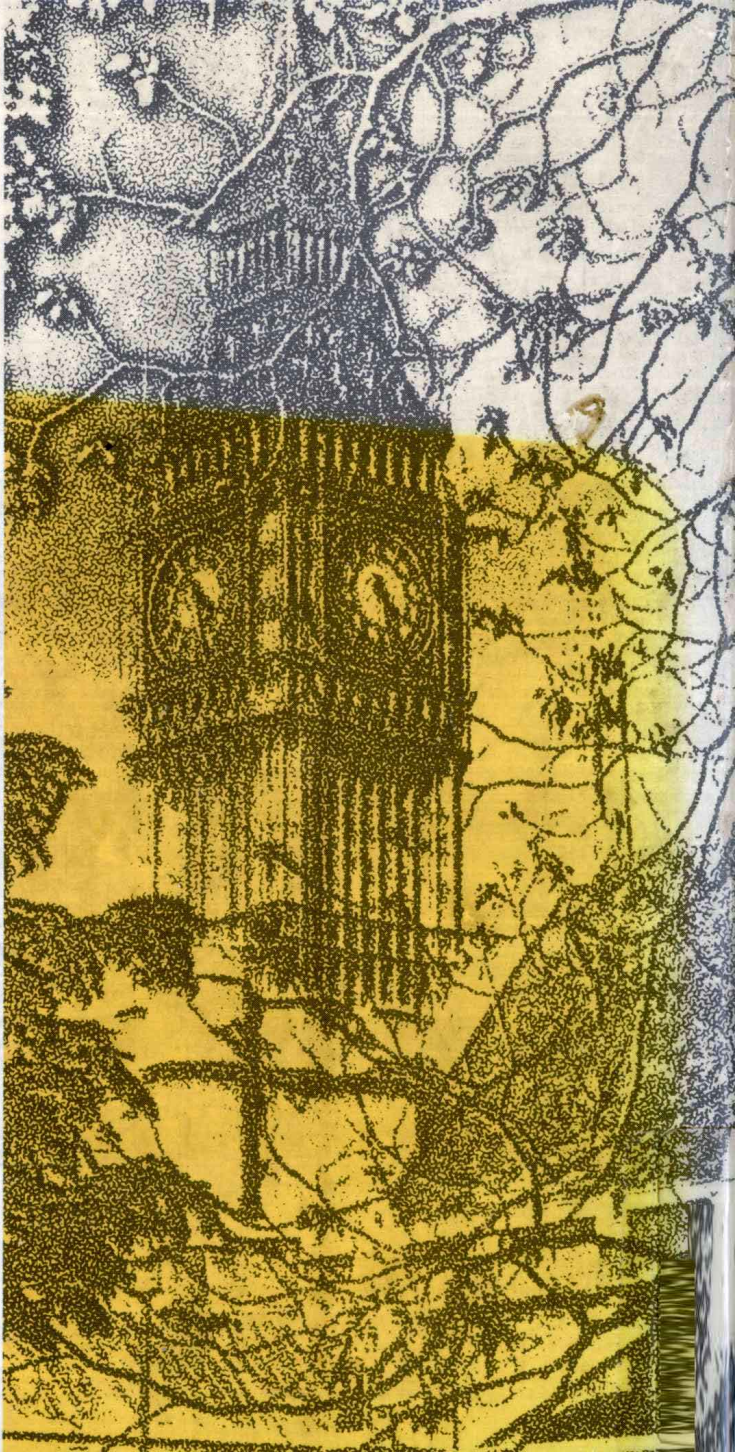
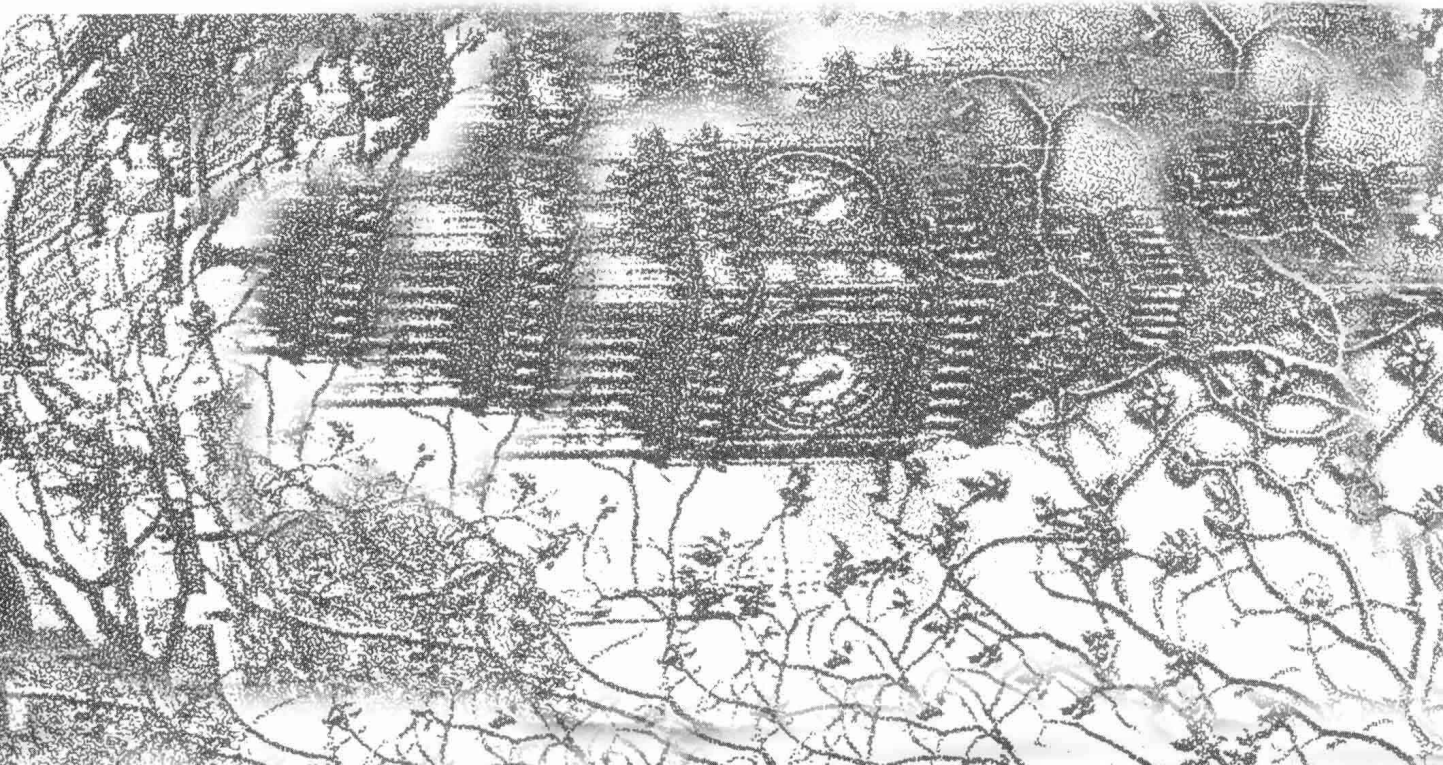
英米文学——イギリス篇②

名作への散歩道

監修——日高八郎
編集——東郷秀光・山本証





英米文学——名作への散歩道　イギリス篇②

1983年5月30日初版第1刷　定価1400円

監修者　日高八郎

編集者　東郷秀光／山本　証

発行者　広永正也

本文組版　三友社出版・電算写植部

印刷所　福音印刷

発行所　三友社出版

〒112 東京都文京区音羽1-19-23 成美堂ビル

☎（03）946-0285　振替　東京4-61642

3098-00104-2780　落丁・乱丁はお取り替えいたします。

カバー・表紙装丁　塩沢美智子

英米文学——イギリス篇②

名作への散歩道

いざ、英国小説の花園へ
――監修者のことば

日高　八郎

この本は、『英米文学――名作への散歩道』というシリーズのなかの一冊です。シリーズの趣旨は、散歩にでも出かけるような軽い気持ちで、英米文学の百花が繚乱と咲く花園へ読者をご案内しようということかと思います。ガイド役をつとめてくださるのは十七名の先生がたで、現に教壇に立つかたがたばかりだけに、その親切な案内ぶりは、かならずや読者にご満足いただけるものと信じます。

この〔イギリス篇②〕では、十八名の作家の手に成る二十篇の作品が取りあげられています。カバーしている時代を作品の発表年代に則していうと、一八四三年出版のディケンズ作『クリスマス・キャロル』から、一九五八年出版のマードック作『鐘』までの、百十五年間ということになり、世紀別でいうと、十九世紀が九篇、二十世紀が十一篇ということになります。

ジャンルという角度からみると、二十篇のうち、詩はエリオットの『荒地』一篇で、あとはほぼ長篇小説です。十九世紀以後、長篇小説が目立って隆盛を誇ったことは否定できませんが、他方、詩にも数々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の名作が残されていることは、たとえばヴィクトリア時代のテニスンとブラウニングの二人の詩人を想起するだけでも充分でしょう。試みに、〔イギリス篇①〕で予定されている作品をジャンル別にみると、二十二篇中長篇小説は六篇で、あとは詩の分野に属するものが十一篇、韻文を主形式とする劇が四篇、それに伝記一篇という構成です。①の方は、なんせよ『ベーオウルフ』から一八一五年出版のオースティン作『エマ』までの、千年を越える長年月の期間をカバーしていますから、右のジャンル構成の当否を云々するのは無意味に近いと私は思います。しかし、②におけるジャンルの均衡については、いささか首をかしげるむきもあろうかと思われます。そしてそれは単に小説と詩のバランスの問題に限るものではありません。たとえば、十九世紀評論界におけるカーライルやラスキンやアーノルド(無論彼は詩人でもあった)たちの名を挙げるだけで充分でしょう。

詳しいことは東郷秀光・山本証両氏の「かいせつ」に譲るとして、本書成立の事情をかえりみますと、②にみられる小説への偏りも、ある程度大目に見ていただけようかと考えるしだいです。つまり、このシリーズの基盤となっているのは、月刊誌『新英語教育』に数年にわたって連載されたエッセイであり、シリーズはかならずしも厳密な計画を前提としたのではなかったという事情にもよるかと思われます。以上、余計なことのようですが、監修者として一言触れさせていただきました。

さて、本書を開いてすぐ気がつくことは、十八名の作家のうち、その三分の一に当たる六名が女流作家で占められている点でしょう。イギリスで十八世紀に勃興した長篇小説は、十九世紀に入るや、スコットやオースティンを筆頭として急速な発達を遂げ、それに伴なう女性作家たちの活躍ぶりは周

知の通りですが、それは本書においても期せずして示されているといえましょう。それは、この②とほぼ同時代を画する(アメリカ篇)(全二十四篇収録予定)中に、偶然にせよ、女流作家は一人も見当たらないという事実をみても、英文学、なかんずく近・現代英国小説界における女性の大きな貢献は、だれも否定できないところでしょう。

また、選ばれた二十篇は、すべて文字通り名作には違いありませんが、今まで比較的論じられることの乏しかった作品の幾つかが含まれていることも、本巻に新鮮味を添えているゆえんであると思います。たとえば、ギャスケル夫人の『メアリー・バートン』、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』、ハーディの『日陰者ジュード』、フォースターの『ハワーズ・エンド荘』、ウォーの『卑しい肉体』、ウルフの『波』、オーウェルの『一九八四年』、ゴールディングの『蠅の王』などがそれです。これらの、いわば比較的手垢のついていない傑作への手引きとしても、読者にとって本書の解題はきわめて有益であろうと信じます。

女性の方三名を含む十七名の執筆者は、平均年齢でいえばおそらく四十歳代かと思われる若さですし、年齢のことなど抜きにしても、どのエッセイもみな若々しくケレンのない文章ばかりです。また、『大いなる遺産』、『日陰者 ジュード』、『若き日の芸術家の肖像』、『一九八四年』、『鐘』に関する諸篇は、本書のためにあらたに書きおろされたエッセイであることも付記しておきましょう。

最後に特に強調しておきたいことは、前述のように、本書のもとは雑誌連載のものではありますが、今回単行本として刊行するにあたって、大幅に加筆されたことです。このため、この名作への散歩道は、

一段と幅の広い、かつ歩きやすい道になったと思います。そして、日夜、英語教育なり英語学習なりにはげんでおられる全国の教師、学生、そして市民のかたがたの愛読を切にねがってペンをおくしだいであります。

一九八三年三月

もくじ

いざ、英国小説の花園へ
――監修者のことば……日高　八郎　2
チャールズ・ディケンズ
『クリスマス・キャロル』……三ツ星堅三　10
シャーロット・ブロンテ
『ジェイン・エア』……東郷　秀光　21
エミリ・ブロンテ
『嵐が丘』……東郷　秀光　33
エリザベス・ギャスケル
『メアリー・バートン――マンチェスター物語』……中村　祥子　45

チャールズ・ディケンズ
『大いなる遺産』……宮崎　孝一　58
ジョージ・エリオット
『ミドルマーチ』……山本　博子　70
トマス・ハーディ
『ダーバヴィル家のテス』……宮田　実　82
トマス・ハーディ
『日陰者ジュード』……安藤　勝夫　95
ジョゼフ・コンラッド
『ロード・ジム』……小野　協一　107
E・M・フォースター
『ハワーズ・エンド荘』……長崎　勇一　117

D・H・ロレンス
『息子と恋人』……山本　証　130
サマセット・モーム
『人間の絆』……山根久之助　142
ジェイムス・ジョイス
『若き日の芸術家の肖像』……鈴木　建三　153
T・S・エリオット
『荒地』……山本　証　165
イーヴリン・ウォー
『卑しい肉体』……中田　保　178
ヴァージニア・ウルフ
『波』……向井千代子　189

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

グレアム・グリーン
『問題の核心』……梶川　渉　200
ジョージ・オーウェル
『一九八四年』……小野　協一　212
ウィリアム・ゴールディング
『蠅の王』……野崎　嘉信　223
アイリス・マードック
『鐘』……蛭川　久康　237
かいせつ……東郷　秀光・山本　証　250

チャールズ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』

三ツ星　堅三

チャールズ・ディケンズ（Daniel Maclise 画，1839年）

ディケンズとの出会い

筆者がまだ高校生だったとき、英語の教科書や、『NHK高等学校講座（上級用）』（講師は、東京外国語大学の梶木隆一氏で、その名講義ぶりは、今でも懐しい思い出となっている）などで、ほんの少しチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812—70）の文章に触れる機会があったが、もっと多くの、まとまった分量で、しかもこの小説家の特徴がよく出ているようなものに接してみたいと思ったのは、大学二年の夏休みであった。手初めに『骨董屋』（*The Old Curiosity Shop*, 1840—41）を読み出したが、女主人公に次から次へと降りか

かる悲運や、スラム街とか工場地帯の迫真的な描写に、息苦しいものを感じて、ときどき机から離れて、気持ちを落ち着かせなければならなかった。日中のうだるような暑さも忘れて、この愛すべき作品に魅せられたのを、まるで昨日のことのように思い出す。

やがて、『オリヴァ・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1837—39)や、『クリスマス・キャロル』(*A Christmas Carol*, 1843)などを読んで行ったが、ここでも、ディケンズは、当時のイギリス下層階級の状態をリアルに描いており、筆者の気を逸らすことがなかった。救貧院(workhouse)に収容されている子供たちが、薄い粥を少ししか与えられないために我慢出来なくなり、オリヴァを先頭に、「どうかもっと下さい」('Please, sir, I want some more.')と要求する、例の有名な場面(これは『オリヴァ・トゥイスト』の圧巻であり、周知のように、「英語の常識」として、人口に膾炙している)、また、『クリスマス・キャロル』の、吝嗇(りんしょく)で、心の冷たい実業家スクルージ(Scrooge)の鮮やかな人物像や、クリスマスの和気藹々たる楽しい情景描写などは、ディケンズならではの出来映えであり、余人の追随を許さないものと感嘆した次第である。

卒業論文では、ひょんなことから、「万人の心を持ったシェイクスピア」(our myriad-minded Shakespeare)と取り組む羽目に陥ったが、大学院に入るや、またディケンズとの付き合いが始まった。しかし、いよいよこのヴィクトリア朝小説家の世界に入って行こうと決心することが出来たのは、アーノルド・ケトル(Arnold Kettle)の名著 *An Introduction to the English Novel*(今では、研究社から『イギリス小説序説』と題して翻訳が出ている)所載の『オリヴァ・トゥイスト』論を読んだときである。

ケトルによれば、この小説の世界は、貧困と圧制と死の世界であり、圧制の手段は暴力と飢餓で、救貧院はその圧制の象徴だが、圧制は何もそこだけにとどまらず、外の世界ロンドンも，貧しい無力な人間を虐げる、より大きな救貧院なのである。ケトルの小説論を読んだとき、説得力があり、読ませる論文とは、こういうものを言うのではないかと思った。

評価の移り変わり

文学史上、不世出の天才というような作家でも、評価は時代とともに変わってきた場合が少なくないが、ディケンズもまた御多分にもれない。彼は、生前から民衆の友として、一般の人々からは彼らの頼れるスポークスマンと仰がれてきたが、G・ギッシング(Gissing)、G・K・チェスタートン(Chesterton)、G・B・ショー(Shaw)などを除くと、いわゆるhighbrowの文人たちからは、メロドラマやセンチメンタリズムや戯画(caricature)を看板とする通俗的で、即興的な大衆作家という酷評を受けてきた。しかし、一九四一年に、エドマンド・ウィルソン(Edmund Wilson)の「ディケンズ——二人のスクルージ」("Dickens: The Two Scrooges")という画期的な論文が出てから、ディケンズ批評に重大な転機がもたらされた。これまでのディケンズ論が、もっぱらクリスマスのように陽気で明るい側面を強調していたのに対し、ウィルソンの論文は、表題からも想像出来るように、ディケンズの中に、もう一人、心を改める前のスクルージ、すなわち冷酷で、業突張りの人間が宿っているということを看破したものである。そこには、前世紀に見られなかった現代の時代意識が投影されてい

る、と考えられなくもない。

それからというものは、「ディケンズは単なるentertainerでもimproviserでもなく、人間の生きる道を社会的関連の中で真剣に追求したモラリストであり、また、小説を書く上での種々の技巧を意識的に開拓し、実践した作家」(宮崎孝一・川本静子『小説の世紀』、開拓社、七十一ページ)なのだという見方に変わってきた。遅きに失したとは言え、これは、当然進むべき評価の方向であったと言えよう。しかしながら、この小説家を"entertainer"とみなす評価の流れは、古くはディケンズと同時代のウォルター・バジョット(Walter Bagehot)以来、今世紀ではF・R・リーヴィス(Leavis)の『偉大なる伝統』(*The Great Tradition*, 1948)に至るまで、依然として続いていることを忘れてはならない。

ディケンズの没後百年目に当たった一九七〇年には、英米の作家、評論家、学者などの著わした、彼に関する研究書や論文集の類いが、めぼしいものだけでも、優に十数冊を越えた。しかし、そこで批評・研究の対象にされているのは、殆どが長篇小説、とりわけ中期から後期にかけて書かれた大作である。確かに、ディケンズの本領が発揮されるのは長篇の力作であり、そこには、人生の苦悩の深いしわを刻んだ大作家の鋭い人間観察と大々的な社会批評が、芸術的にみごとに繰り広げられていて、われわれを引きつけずにはおかない。それに引き換え、『クリスマス・キャロル』のごときは、わずか七十ページそこそこの短い物語にすぎないので、八百ページを越える堂々たる大作が盛んに持てはやされている昨今では、影の薄い小品とみなされても、ある程度致し方ないことかもしれない。

ところで、『クリスマス・キャロル』は、従来、子供の楽しむお伽噺や隣人愛を説いた物語として賞

翫されてきた。スクルージという守銭奴の老実業家が、あるクリスマスの前夜、三人の精霊から、自分の過去、現在、未来の姿を見せつけられて、これまでの行ないがどれほど冷酷で貪欲なものであるか、そして、このようなことを続けていれば、最後はいかに惨めな野垂れ死にをするかを思い知り、翻然と心を改めるというのだから、「良きサマリア人」(Good Samaritan)の善意を讃えた教訓談と言われるのも十分うなずける。しかし、同時に、『クリスマス・キャロル』をもって始まる一連の『クリスマス・ブックス』(*Christmas Books*)には、この小説家の本質的な特徴が顕著に見られ、単なる教訓談とか、お伽噺として済ますことのできないものがある。

『クリスマス・キャロル』の意義

スクルージという名は、"screw"(吝ん坊)から出ているし、彼自身、爪に火を灯すような暮らしをしており、従業員のボッブ(Bob)にも、食うや食わずの薄給しか与えない。だから、スクルージと言えば、守銭奴の代名詞のごとくみなされるが、彼は、例えば『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849—50)に出てくる運送屋のバーキス(Barkis)のような単なる締まり屋でなく、「あらゆる人情に近寄ってはいけないと警告して、人生の混雑した道の中へ割り込んで行く」という徹底した主義を持ち、また、いかにすれば安く買って、とことん高く売りつけられるかということに、現を抜かしている功利主義的実業家に他ならない。

『オリヴァ・トゥイスト』以来、ディケンズがしばしば槍玉に上げている思想は、功利主義とともに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com